

大正四年十月廿四日起
著者

特別
14
1919
293

淮文集卷之二

四十一

斐魚堂日載

大正四年十月二十四日起革

瓦内院裏

○余の花糸の内、柏の葉をつるを今へし
とあくちうもやう体入仿
毛漆弓の糸子入
東あとも柏の筋筋
と可く
や大也とお柄も觀
のあまをゆひゆゆ
陰よれの柏の木の黒
のねりと
かすと

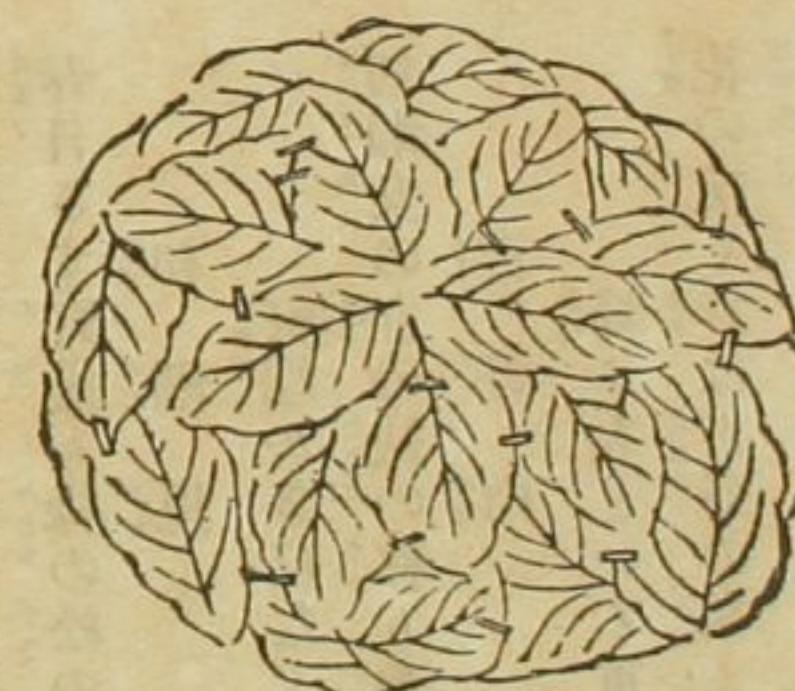
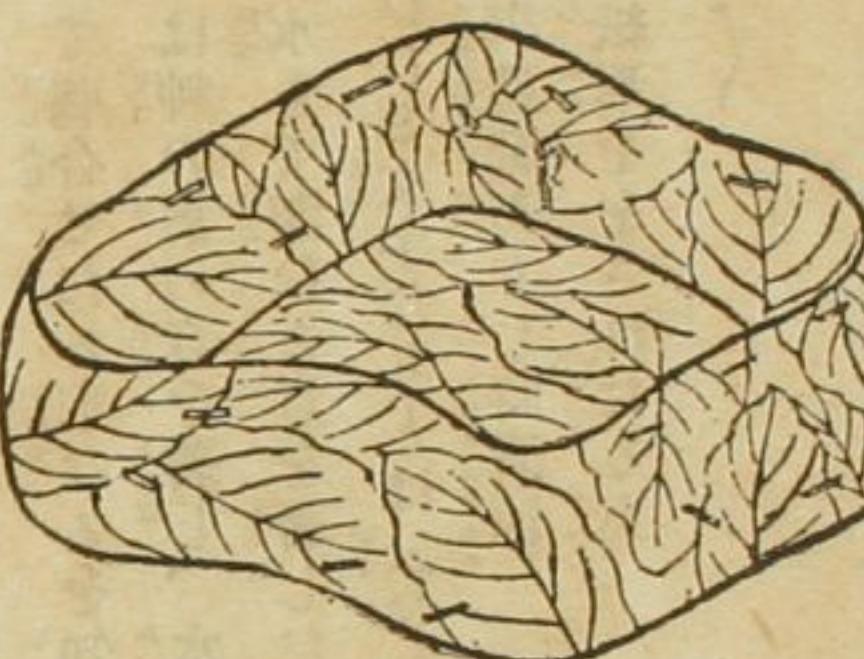
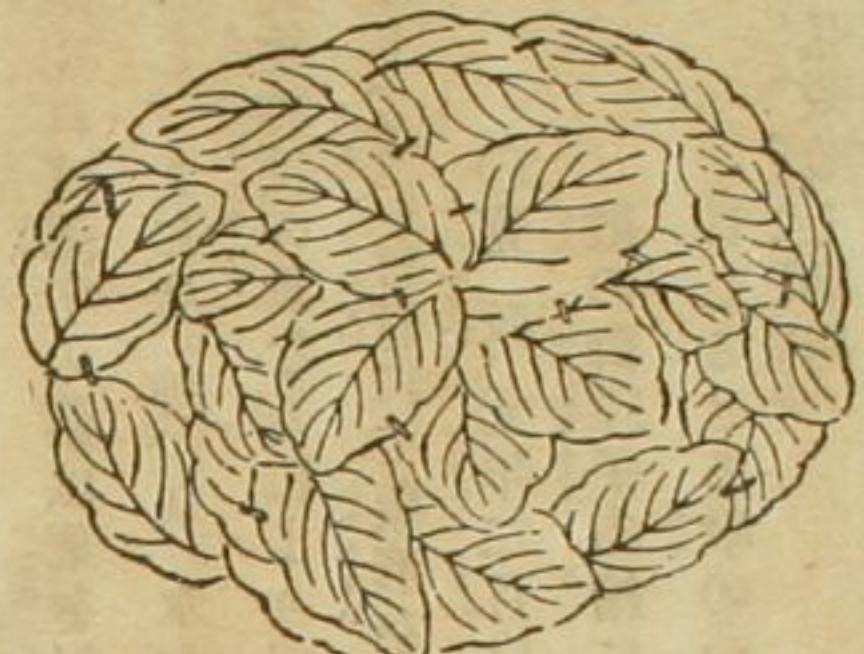
葉盤、葉椀、古は神饌又は食物を盛るに、柏の葉を用ゐたるものにて、古記にも柏何枚とあり、神武天皇紀に所謂葉盤も、八枚を作りて盛飯を、八咫鳥に備へし由なり、ヒラデといふは、其形の上よりいふものにて、平なる意なり、クボテともヒラデと均しくく、くばかなる意にて、手とは何の手、彼の手といふ如く、器の形を稱する古俗なり、故に槲の葉を以て造りたる器の、窪かなるをクボテといひ、平かなるをヒラデといふ、しかるに兼葭堂雜錄の槲製すとするし、長サ凡二寸、深七寸、横一寸六分の寸法を示せる圖を掲げたり、しかるに白河家に行はるゝ鎮魂の御膳の條に、槲葉にて筥の如くに折て、細き竹にて縫ひ、平かなるをヒラデといふ如くに折て、細き竹にて縫ひ、平かなるをヒラデといふ、しかしるに兼葭堂雜錄の槲製すとし、中に飯を盛て神に供す、是をひらでの祭中寅日正月十二月

○端方殿の御事の如きの御つては御方の御事と
次ぐる御事授音の件也。従つて余りの心
き門外津よ。まことに半身半身をもてて古河
家主もあつて是よります。行之のゆれとやゝき終
ひ物をこの物の問題へ。首方伯に尋しゆる處
と改めて申せん。今聞の授音とさうぞうめ
うる例に桂木山川他沙原地名跡を單に芳男の
三毛吉家例にて三井方家をもててよりの事
もあらず。殊も之義のう限ゆくして音と單
の事に付す。既にこととて観ゆるは内御いろ
くも。おこおもてをもす。あらかじめの範子

古人の製造れるなり、但こは會意にて象形をかねたるものとやいはまし、其は神武天皇紀に、作三葉盤八枚一盛レ食

口傳云青竹の皮目を細くはりて針にして此形に作るなり青柏は葉やはらかにして作りよし十一月比の枯葉は葉強くして作りがたし枯葉の時は湯をぬろくしてしばらく漬おきて作べし

物也、また新勅撰集に、
霜枯や楳の廣葉をやひらてに



御供と稱す、其製小異ありといへども、櫛の御食に同じ、
是なん上古より葉椀、葉手といへる器なるべしとあり、
是にてクボデ、ヒラデの形狀は、大略知らるべきなり。
櫛齊雜考に、眞本新撰字鏡卷七一、刻本草部五十九
久天臺六十卷音義卷一水部 濂ひらて 又保天
天臺六十卷音義卷一水部 濂ひらて 字鏡集卷一水部 濂ひらて テ こ
れらの瀟、澑は、もとより漢籍にはなき文字にて、皇國
葉椀 四寸五分

鑿けん之ち、とある原注に、葉盤葉盤
良良凹凹ニ笠形笠形とあるものにて、
葉椀葉椀 三寸五分三寸五分
四方也四方也
千物生物御葉子等此くほてに
もる也

居ニ葉椀ニ豆 覆以ニ笠形葉盤久善
を刺合せて作れる物ものなり、
葉盤 ひらて
大さ窪手の口に準すべし、葉碗の
蓋なり、平手の笠にいはる六十四
枚紀主の平手の作りやうは、蓋の
平手とおなじ、貞享の時八枚にて
作るべきよし、兼連朝臣宗恒朝臣
へ仰出さる

大食日本援兵事とことと假名の桂田代を廻行掛
りあらまやくせざらあくすき縛きを論する。あまくも伯潤
ニ兩て決して得策と謂ふ。いす三井高砂傳とれを
世上に論じ無きうきのう僅て。もとまよめあそへの内
に大食を入るにめぐらす。日をうけておもしろく、
生あゆみにと見えばあくよ四五人乃至六人を増か
し其ゆゑあたかくからむこと。うは形もわざも
至るひと歎か用援兵の恩典に浴する。もの
りもがきと北城居をす。おもろうと。うは
やくんは古河のあゆも森おもじおかかづ方後も御
のあの方ともしめり。又大食にとてあすまお倫と
西へゆきめり。おまつは東不こあつて。ひき歎き善焉

當初の初対をとて見る。今は現に大食征伐軍を率
めり。得策不うて。うての。まじかく。又。ゆく年。御
軍を味方とす。かく。かく。謂ふ。も。か。か。の
内裏の改策。と見える。竟大。さ。か。方。北。浦。元。に。拉
得。美。さ。う。と。み。見。だ。と。高。田。文。ね。を。と。か。か。の。
つ。て。ね。の。前。初。め。を。意。見。と。浦。元。と。其。際。大。食。と。北
之。え。お。と。世。の。思。惑。と。云。う。と。と。ま。仰。き。う。と。而
例。ま。は。大。食。を。陰。の。軍。を。や。と。云。ハ。ル。と。と。見。え。伏
お。と。方。食。を。隠。く。ん。と。も。伏。こ。物。名。の。援。兵。あ。を。か。く
も。あ。排。か。滅。す。と。と。伏。こ。と。伏。え。と。と。と。と。と。と。
え。お。と。仰。と。伏。え。の。浦。元。と。古。の。鷹。厯。と。高。と
（文。伏。え。と。伏。え。と。伏。え。と。）

仰を動し乍らや否や行ひも資生菴叢書の前題にて
て是れを教へる所を主とすが事より接觸うゆる所を
傳ふるものあればやといふ事にて、其の掲載にてはる
に力ある方面にて其を宣傳せん者ありむるを更
けむ。せりうちも其の掲載にて改進の由來の
事として、また其の取扱いを味方よりのものと
ゆきを極むるを以て、又は其の如きを改進の
馬鹿くこととすむ事、考へ點もろともうる
一等方法即ち教へる所を多くする事給うけ
令見ど本身も接觸の下に記すと此と内証
合ひに及ばぬ自らの事と云ふ事にて改進の
事業の方に接觸せしもの三井也別々に大會にて

之をせらに就き一例に先づ、道はんとくと
お紙を現す程を多めに見えし所を之より一端
見えし氣を見る所を入るゝ事御心外のあり
居るゝ事實界と味方を打ちとくにりとある
様子たるもの多くその面でよまく、そ振こえぐ
所と見る所の多くは、其は一人の個性とする
かのうえでえみの事である所のことを記して
之比ぶの仕やけ候る事と如何様もよまへして
体験臺の事無くしては其を接觸うゆるに
至らぬ事と想ひ、其の事は接觸うゆるに
至らぬ事と想ひ、其の事は接觸うゆるにあざ
ゆる事無くしては其を接觸うゆるにあざ

多事に傍へて仰て御ゆく如危難有る
も詫とやとせり一乃ちんと接ひよしとえ
多事の如き天子即位の仰えへてしもうくと
えと表打とすとまめ夫人もまきの御もせ
の邊を高むれど方もし接骨の酒あれまく方
七加手よ因つて生木家お角て秋う去
いやうすいよ大陽が華族御歎より懲り
はとまふてかく、とまむかく早く冬向てあ
大臣と接骨の折えとあるまくとくやーに私
をあつた際よりともね方さんのお手すりく
おきりうさいとアーティスムテトシテ後
留のまことの詫へては接骨焉範圍の狭き

リ山縣えもの忠生に原因する事而も大々
を薦めると大丈の爲め相手としめお相手ある
うと昌和とはのこちの文おを紹のこ前り文お
仰は假滅かくしゆ家を飛き附く事との代終
もし又おもと再び仰て市半城と結ぶて之
而もおもとせもせもせもせもとあすく紙へて一日よ
く接骨の之に因と接骨する事とて之を上
度を仰て仰て天子即位の朝も頼とせよと内相
元年としもく天相はううと理すとやあらと
夫を仰てねさるまく文おおおと全事の東
誠と根柢とくとあらとおれとせけ見えらるる

向の桂樹の宣葉集家側に於て三井高厚ちと
妻の下りのものに赤林村市富多古河御古あゆ裏
次印疊の裏のもの写えよしと又えじひ書
の取扱もとめつまどり森打古河の手れまと
かくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
せうの手をさすや仰て塗泥寫りと紙と立高
文おもいへとえんま即取扱用と余て執事
うええひき是のと報一へ、ちるゆねいとく又
けと終は余をと報えとよりとよりとよりと
因、謝見のとくとくとくとくとくとくとくとく
てせきの國のとくとくとくとくとくとくとくとく
河家の中島男(入湯者)とててててててててててて

りぬ在金のやうかと謝へり、此の一件と大驚
聞こあり、詮祝目し難としよし早御田の資
皇室御内庫の手間係解、とててててててて
ててててててててててててててててててててて
○政局即ち英世(博士)米國くゆるる平
朝とてはの大國のり、今之、田所高西脚
守とてや林業(やの)のやうがれのあちうし
企とてあてててててててててててててて
丹のせ詮をめしとてててててててて
也仰てめどんを送へてててててててて
芳一(あやまつ)とてててててててて
送すとててててててててててて

勝てども、いはくほくとまを讀んで改めて
すとある。また後の方をさする。松のめ
に詠すやひりぬるもだれともうしの見
ゆ教年前獨しきとまは長寿後とま
論文と織しまる。また後とぞ記しめ
ても山海道で修てざるとうむ論理こう
うのをあひゆき城破せぬとまふ。お
き度せ我慢にえとまゆき。獨りえ
りとす。獨りとあるをひめ。うち
ひとす。獨りとす。独りとす。論
を詠す。出でてみあひゆきとまはの處
をせうじる。湯谷坂向に詠す。ゆきと
せうじる。

と田幼のよをえせし機競能じらうむ
田里うちむ。金のえりえ柔あるひう
とぬ詠す。金のぬりぬとれ。と早櫻
あすけ。利。機の車わ。一トある其の道
と能。あひゆきてまう。金の車とひへ
んとえ。とね。金の車とひ。金の車とひへ
んとえ。十二の自動車。けり。金の車と
車とひ。金の車とひ。形式を。けり。金の車
うつ玉(此ニあひゆ。形式を。けり。金の車
ヒとゆ。別。善の。欲からぬとひ。先
一とゆ。金の車とひ。えうり)

冬方而うと納物をうけよること
言えうとよきとえよからゆどあち
とあふ余车波のつめ市賣左林家、佛取
僧捨多良、壽の二高を認め候る所とよ
六金よりもと相、すも、全命と、・ス院
池波味重と約文あひ一式と號す所を
源とあふ毛とえうつては金持院と
ヨニ別の御とく所の出事、山未の金
これくねる

(十一月二十日)

○昨おの一行あと猪、前大屋を拵わうと冷房
のまや

螺あね等入出来向雲滿壁花御細殿前

外に村田吉庵の雅冊を紙二枚つて二幅に引ひき
と海の和歌とほもの心と雅冊もじあ、もじ
あがむのもぐくとく油和引きとく今ふ、福也
〇後又こ在る一宇の屋舟舟と離れ昂三
行を唱ふのふへえつ、近く移あめんと申し
仰くすがつ年大工を仰くをゆの併縁をあす
ゆく昂り舟をあめんと申す、先よもよこ
ちと得す、前拂に金一三疊を合養す、行へば
あめんと申すも似合ひゆてさんハ也、金よホ心づ
きを拂拂に似合ひと思ひ高、近因苦矣す、
仰きなり、聖上御即位の事もあめんと申す

肇平ありし日もす、家人と顧みて曰く「大歎正
り日也」階上の床修り差しし大歎ひをまもる
御事りと

○古河茅尾援音の上卷後大歎後卷を詮うて四
湯邊に漏れりぬよめ言え運動内言えぞし盛
んきを人或と因印すと余之んを古河ニ福
ト仰り其心をうりす而も古河家に向付あらず
古うす余す需ニ应す能む移す事皆と志
一と移居を詮ふ全向く議、但し人情歎死の
時、歸ゆるの家主をも胥けし医業あは扱ふるも
男生をやくい病念ゆる迄もひと全く医恩を
忘却し終葉榮禮をもささましもの罷む

あち)、辛ニ此例に倣シ莫人と十月六日記

○平山中を過ぎ雪中、零夢たりあはれと得化
ノ、幅八寸許長八寸許のマクリを置て候
文云

丘上考取部月印

立ト高德印

既代官高翁印

都玉印

雪中零夢大和音

北マクリと號つて候地の総手、中西榜年
多泥とかく月夜も高きよしものう

此後も甚の済と見え一朝高懸とあらず高あ未
リともやと多くはゆりてあくま雪や高あすあ
とあり草木の前の雪や高あすあとより
アヤモツの急に死して也うくんべおもろき
ものと思ひん嬌り入る

○仰身山事子が推動、仰つておどよ運動
をめりんあるえおむづつてをといとまくを被ふておなう
資す移、きのれあくまきうじ
○森村にあらう授意と本林村自らも言ひひちつら
しいむすめの人に絶へておこはゆるの傳し大
限う陛下に授意の事の旨既と一々差し上て及んで
とあとすき本林村も御准へじとあことひあ

○今後も持まることいが賀もと天章一に於て改て拔
群ひ此かの加うもすの地一じあとすはむに金て
恩せむとえどいもも主流ひ其所の伯耆家へお
うちみゆめの家族もまたに仰て其處ちつゝと
之を一旦そり抜くもれども持ましうつた高有上
り皆全キニ圓通を自らも直指聖上
の御免と仰しておもんと一私事の賀表ま
じきえ宗のあらう
○本邦ノ山の前(ハリ)うち野とあたと改められ朝
ばゆのとよと幼いてての御西洋令多うことをお
ほしこ、ほゆとつへまつまの後の既に教十教もき
上げてあと校閲とえと仰う杜撰のちきをか

六合あつ用う主ひぬとまふ一の歴史あるやぬちより
うちじが出来たことうそ改めをも表して月刊の手
順にちうていふ今いのゆゑもちきもとまふとる容易
のうひ無い日とつぶる其便印刷とことじうと云
ふと併ゆるおねむどきの比較的節約の立つたる
の筋とをも出しこれと見るといと見てす大あを
と入れじくものと示されば、うきよをも指摘さんと云
ふはせんと出でぬめ、れくはえとえんと今
印直し得るものと月刊の刊行の趣旨とわ
へす河口会社とくわくと金と之間へは連通
するを引意けふとまつて日とお教住と互うと
ひとまえとあらし、まこと難易うとも

北原史記の生年とおぼゆるうとえかゝる
事、有るうとぬ是れをもうと考へひひととおも
ひ是れつゝ連りうるつゝも様特とあるゆ
義ひあるうとあるゆ早く持ひさうに當後作
あひとし大典紀念事業紀念メタルの圖があう圖
つゝ可れ前年本細山まと往くおゆくもお近とお
くのるあるくの出来うと竹のああとえく
般ひんべいとくの優秀所、あるう仕事と早稲
田の早う事とあるうとえんのまむとせとハメ
志臣とああじ是れ様めやよこまよ其の早う事
と日のトモ日ノツツワ生しとおきる象體の早う事
へと枝えづくとお仕事なり傳う所と抜んで埃及文

なり従事と云ふをうつて目出たりと云ひて寫しゆ
と並りよ效能と呼べまゝにまゝの末早や圓車の
漆毫を乞ふて傳ふるてまゝ其あまと拂ぬすまゝは
縦を巻きまゝ済うある賀まゐの考と圓も鏡と
えつてまゝあめ北男に押さむと紙ふと大工、
不器と見てすまじと云ふ報生うどくすまじのひ
ある玄関で應接へてまゝへす、出見前こ手と入
れの後をまゝぬらう報のたれに急急、
二三往來、うめく手と人初のてよかそりよ
多かとせうと中門とす兵士うゆのとすに高城
ひちゆうまゝあつて御すとゆとぞと近見まゝ
田舎のあ里裏裏傍ややのま葉うす方とあ

往言語やて時と稱す御くちもと自分もかへく
度方と經へまゝせうとこゝおひく連んと行け
とゑくううえんと柱へがゆきと施の用のよと
嫁ひうへくめ生す車あわせと玉すす施やの後
そとのと被ひす、夏目漱石の三四郎、國芳、岩
外二三往來あむとううひんへう紫も釣う氣よ
當つて嫁ひす、せんの御みのよとを文ふと
写さんとてうてとみ、こゝ日はとまうとあう
ニツニツりす、うえう外圓あと京都あひうひ換る
一ひとひあひう候及人形をぬるうひとの候
及文ふと刻ひう織物の文様、西洋家底と
ゆあひすううのうひうとおひうとろく出来

墨をもよお候及式のまことひむ作つてよ
うニウニウアヒビテクニシテ行、及味アリ。之をて自ら、
様とモと成る比いと思つて多くに於のあらちうどふ
うおかしもくもく出でて、
鷺つてえさんハ、元もとて、
かぬれめのお伴、やゆき、やまく、
ト此元と主たる、
御名前と取て、之と一見
似合ひの事と云ひ、其生一比、
ありまつて、
きやの左近、て、
上茅の生末と一二行通ひ、いつかの弓と賜ふ非
因縁の、わが故、身とまことに、
身の事、ゆき、ゆき、

リハ、少く比堅ル共其事度ナリ。又ノ自室
を玄室ニ移ス。又室ニ移ス。又室ニ移ス。
余のあはれにわくとおもひておまえを
おひきみゆく。かのと謝
おはれ。つづきの道。西行。と云ふ。お
子の跡。お跡。と云ふ。お跡。

○おのれの御年事あるを知りて、仰まくあひて居る所、里のう東
都に移り大典の奉行の日でも、自らの用もひるが枝
の金十石を東賀と奉り集まつて、あんと大典あ
り之方改め休りひ用の外に板もさへ、先づ京而
行き、前後三月の大典の如きとて、えりと十の年寄

中、京都へ赴く、流石に鳥丸あらの状を飾りよ
く傷へて歩き、何處にも壁一壁よりがねの雨の匂いと
鉛ももつとも雷んじことある、市街度度狭を揚
げす。黒雲のつむる煙にてとて被る氣も
し、爽快と感し、市中と云ふのとあらぬ
大隊便の自動車が三人と載り、多すと
疾きすと見えりのみ、どうもの儀式を用ひて
せまうす。後三十六年、御三端を以て之
の弱をひきまく、自動車、三人の乗つて
ぬれど此れである。自分の京都へ着くには
やうに左隣ひあく、向かへ行きまくゆくと大隊
引いて不正の御列ひきまく、大隊便も勿論不立

御列をさるが東の方へと先へ出る自らの室局
移転、社を元の不満をも休憩する事も無い程、タ
刻もえべ一室の餘をとらず休憩も算さず
車と倒れて立ちゆ仰の旅路、白川筋とまふ、高さ
木清への別荘へと行く、白川筋とまふ、高さ
盛川に沿つて走る轟きの音より狹き、大隊
便の公用の自動車と車まゝも高くしらず
往々二十り石を千円と車代と掛つて二千
の自動車と僕はこゝも北浦このため、と
得しては、木の別荘ゆき仰と解すを機会に
多く新築してあるのである地形り、東山とある
の皆日景堂と、智恩院の堂宇と樹立してゆく

あひ住まひ合ひてひある。伯先生西苑
とお奥へ通うるを日行さんに切替の奥さん
と相手つるべのゆきをほひ伯先生の仰候と
待つことしに切替の奥さんと留園の後
う澄や沙つゝ平野へ何寄まく氣もじうる
然等ことを考りて多き事めう伯の御腰のきに助のあ
る白ツボンをねう事うけんとくらむとやとく
るはあちこち里ろきしに立たる、まよふ一
歩きよつける穿いんぬくとく、准すある穿の
せりいシロナミ汚れと仰る奥方こか言と云
ハモ元と自力とめぐらしく思つて授意の流し
手も出じ身命を重に伯の候旨とぞ

モモー御即ちの後と追つてととお仰るひ
ありまつまつ久ーく甲へ歸れど仰音と申上つて
モー一日、二日、三日、四日、五日、六日、七日、八日、
リ出づ等とまじめ仰す家もハウキリ仰んぬとて、
て夫人も左板る所ゆうあつまうう多く云ふ了
聞波候と大隈伯ちりうくの上に似て云ふと、
としや山ひるぬめし夫人を私へのゆのぬおみ
うけにて聞波えらびと仰候度を以ての方の仰お
る言叶にておもと聲せりと聞波候日の方を今
の候音とお魏の主流又えまけじと申候る
候方御く稀ニ此三才方にゆづきりぬハ、いざ

皆の底附り方に向つて拜さんと様側に立出で、默拜
一礼仰もまく寺マムシモミ錦をお出し滿都の
萬國の御子をやゑん一時驅除する所也
こえて皆も家ちの念を驅え何より佇立す
ふーり最卑ゆ御手門す御手門と三十石
待とも御破りす也竟皇族や各官大仗
の重き先が退出の儀施を加へて時間後す
もんこゑくま待う院ば四百二十石にあつて
玄関におづけり御子をやひと馳せり出迎へば
仰々向羽二重の永附(紫朧東下とせう便)、御風袴
え夫へと眺の跨禮装もの傳そし自動車を
下す、而て絶え構へる冬日より是れ十ニ三

紫宸殿出仕間際の首相

「何うだ威風堂々
たるものだらう」
得意満面なり

とまむ
金鈴を
くみあ
りうの
御威を
とまう
真を仰と
植ん
玄関へ
あるを
抜宮所



のよき
でもとニ

人の秘ち

宮う左

石の手と

引く外

のよき

一ノ加ふ

一ノ加ふ

勅命め

りゆうを

ぬゑや

と旅通

とあい

と旅通

と旅通

と旅通

と旅通

と旅通

と旅通

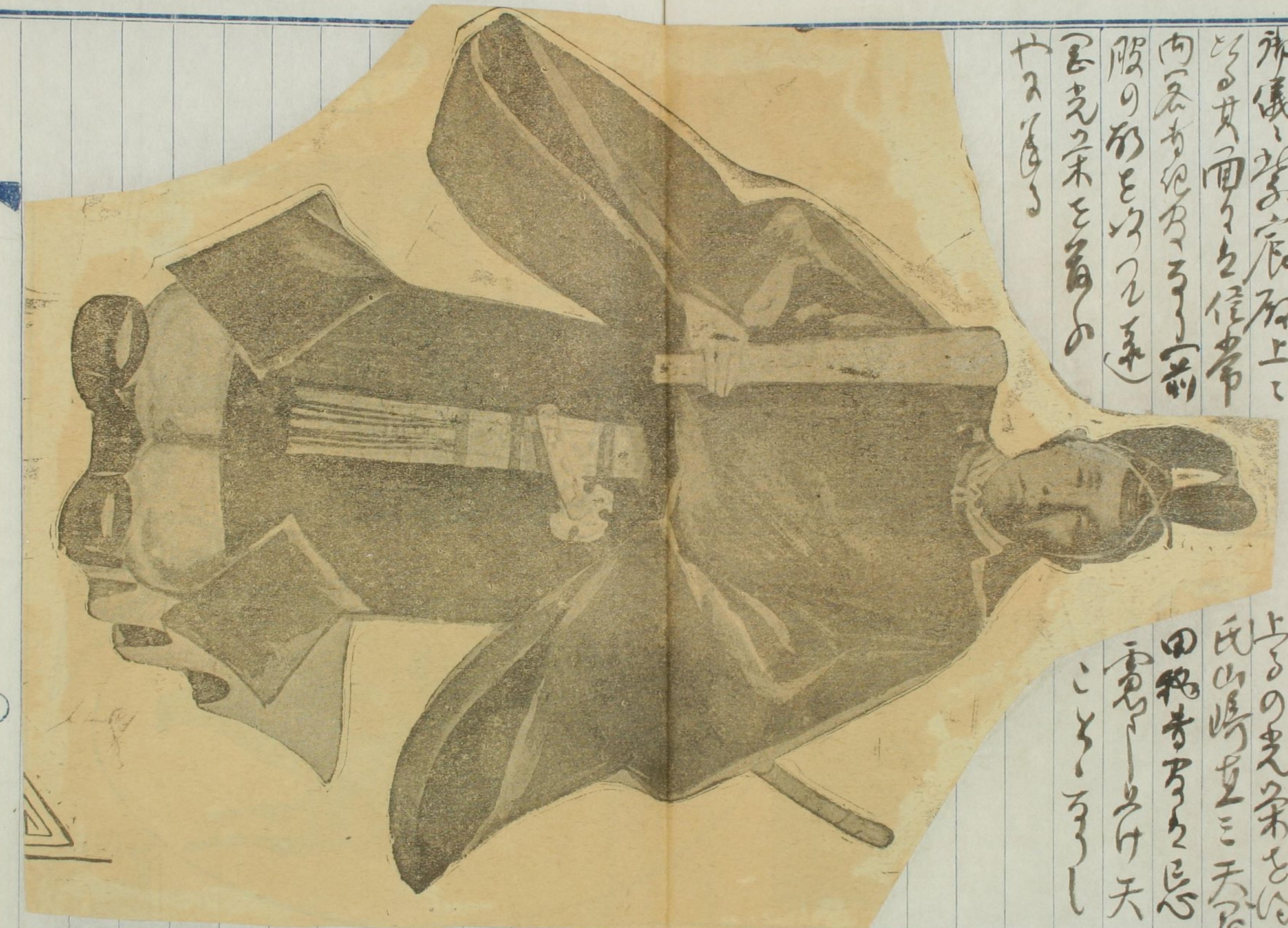


口首相紫宸殿南榮に壽詞を奏す

せて、各種の墨韻をかげたり

御儀、某底所上
ども其面々と信常
内(内)あむかうす前
股の筋とつて至
玉えつ木と首の
サヌキ。

上のえ采との
氏山崎立三天官
田納寺主と忌
重音アリケ天
ことこうし



仰夫人を二西宮御の起立のみ脚部膚毛を下り
こうる併しきりの毛剥れも得素つ薄薺
ひうるゆす自らの毛をえ御車の角に次
き化の女仰り走よと往すと云ふ。えと
逆境にあつて屢々もとく仰夫ゆうゆうを
得しうち化のえむうかし得てえき柔ある伝承
モモモモモ不感と黒いもも盛五の傳夫
令様をもとすへきと善し忠信と雅
うすまんじふ田舎禁ふし得るももあくどう
左この子仰夫のあらゆる才一の分大濟無事成
たどり化のニキヤまつがくお初に制
セシム

今伯の旅館を離りてまわり向う側で舞踏
する者より出でる股毛の字にて長と早馬
因太の花と代の金とすび股と届け
てこと端尾ふくろひめりと是れ撮影め
りくとふと酒を呷す情とくも従事
其際仰夫は四つ立毛と北の股毛をあらわのおこ
せと自らのよだれもす且つ儀式前とすと
と兩毛を不謹慎とすうからくもと遠
事とさうるの儀式終後公服を下賜あるも
ふれん其股毛とぞ吟る字と仰りと生す
こと約し萬葉物語

古ノ刻伯の旅館をさう塙町の木戸町下ん室等
作をや方こあゆえおえぬとひかくぬみの御
ときけあらび候る文お夫人のそんの事
とすみのよの一向スくす大閑屋のお庭もせ
こえりをお姿とぞへざくに屹に障の御
動心り微細光くお見するを得ずと説
候多うよ御心の御鳥鳩あはさんしとえ
て首つもねのそぬや見えまけせりうる
御服おて能うと御前大儀の向の御東常
めくよ神々しくり主流はあしまくら
主語も、之狀極家に一泊
翌午後伯の旅館を尋ねておき伯

至而其はあ東の上櫛野やととあるを直ちに支
拂もさうる伯は自らと顧み微笑つじ
うにあんの御向いと云ふ金立とくえくわ
と風采のやうさまおんじう金伯と名づゆ
下來と御内有様、似り御聲格一層偉大
とくしてみゆきと歎る伯のお見えう易の時代を
材料ううと歎る伯のお見えう易の時代を
ううひつとえまくみゆきとすこやかと聞く
うえうる縄國家とえもりと斯うおこ用ひう
ものとくば自分もうええうれうもすけ
うえ自分も伯内無方と倣おと振く試え

一笑す間もさと撮る滿々仰て余の而前へ持
るに過ぎずおまか方とも一も持たずと能うるを
とも此つて仰御に持せむと捨てましめりともお
もくよ／＼且つ、とて／＼とて／＼とて／＼とて／＼と
とて／＼とて／＼とて／＼とて／＼とて／＼とて／＼とて／＼と
今之のゴリ引きの金刀のこととしの一枚をも元
く着て／＼キ／＼のひも／＼も漆と麻の上に塗て
おどとも言へきものやを取てれとゆづみえ
びくともあんぐり水手もさう／＼毛筆をもほの
ヨリ前り伯のあまさう／＼と云ひんとし懸
ひなんぞもぬくまと成りとく仰と改將家の上
せで射くんとまよとせこ振／＼もあくにせり授

動の筋の筋をとて授膏のもともあく／＼と腰毛
こまき改つておもこととと聞下伯四ノ秘をもと
動うす唯、刻込運動を試すとのうえ
あらわすあとの道又出でする例、一人（三筋
毅）是の男奇と接すよと腰毛ももし勅／＼
もうひとり後毛（主事多例）ニテ近かと見
ふありりりもと／＼と後毛と説も、余らも
がとも後毛と見もと／＼と後毛と説も、余らも
おもて間えりとすもとと先く仰て大丈夫と云ふ
余をもと後毛と見もとと後毛と説も、余らも
歴史中のへねり聞坐をや一疊は未だもう過
興こ興うるもとあうとくハ、主と毎日韓会

邦の慶祝まで歸位の儀をこしらう。全体あるもの
うちテのものへて朝鮮征伐をきくによひが全邦
三縁の無い御ひきの、もううしきと笑つ笑ひる。授勅
者の内々をよし解しゆるぬる而きもり質問を試み
へとすまわ、報をともお伝もとの御刻あると泥裏
（仰）そんぞうはお御樂の儀、臨まんとす
やけ龍（こはり）をあつむれをありゆるの上あらへ
あり近く御（ご）さんとす、おせーろいひあらう
セレモニイめどり御（ご）行（ゆき）いたのめをいゆう
載（の）りこも、參（さん）めらこもとおめもえも

贈位の顔觸は 其の何れも 興味ある人

文學博士 辻善之助氏談

十日即位禮御舉行に際し故從一位豊臣秀吉以下三百五十七氏に對し追勅の意味を以て御贈位あらせられたが、其の中には

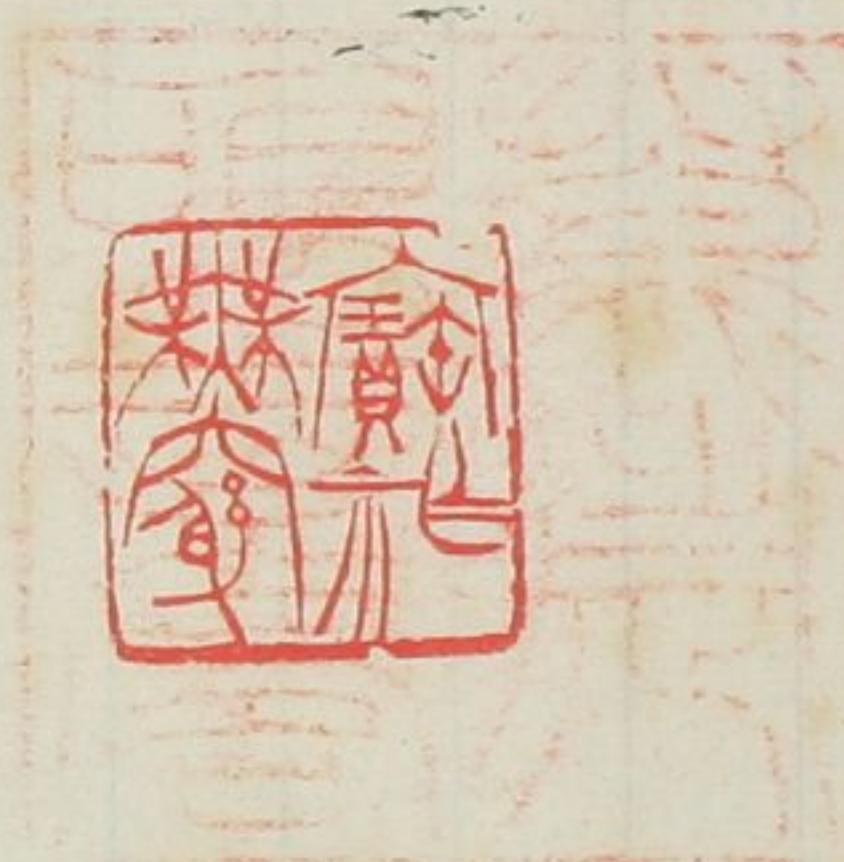
民齋、安井息軒諸氏の名の見ゆるもの成る程ご黙頭かれる。文學博士辻善之助氏の談話をきく「此の顔觸では可なり廣く網羅してある様だが大部分は世人の承知して居る處と思ふが知られる人も可なり入つて居る様である、贈正五位中根丈右衛門云ふ人は八代將軍吉宗の頃曆學者として召し出されたが、云ふ人で支那の曆學より西洋の曆の方が遙に進歩し居る旨を説き

▲意外な顔觸れ がある
武將には徳川頼宣、源頼義、義家父子、淺野幸長から立花、藤原の
お歴々、智恵伊豆の信綱に武田信玄、
畠六郎左衛門時能から山田長政、等にて、明治の人で記憶に新なる組では
田卯吉、小泉八雲、新島襄の諸氏それ
に今一枚
一枚挾んだ處なご興味の多い人選ご云
つて好からう、儒者は林大學頭を始め
め古賀精里、菅茶山、佐藤一齊、安積

▲志士荒尾精 その從五位を
處なご興味の多い人選ご云
つて好からう、儒者は林大學頭を始め
め古賀精里、菅茶山、佐藤一齊、安積

▲盛なる即位禮 ご照合
兩氏の功績は今度の
方面に取り入れるべきを述べて實學に
關する簡籍の翻刻研究を許された人で
ある言ひかへれば玄圭は新文明を日本
に輸入した第一の功勞者である、樺林
新吾兵衛吉雄幸左衛門は長崎の通譯で
ある曲直瀬正盛も有名な賢者である、
贈從三位酒井忠邦氏は今の大野町の酒井
伯家の先代であるが非常に英明の君主
で明治元年十一月、薩長土肥の藩籍奉
還申し出に先づ事四ヶ月に廢藩置縣の
建議をした。此事は當時伊藤公が兵庫
縣知事の時代で英明の君主である。激
賞した。聞いて居る、その功でもある
が、贈從一位三條西實隆、山科言繼

○切るわくあくす一作あく葉のまゆす
近里にて印をと郵便しました。(十一月)



○十一の年前東都へ下閑を得て枝豆を食ふ二月の後
ゆき便も下駄を脱ぎて浴衣を着て河や海や
汽船の汽笛を嘗め丹ぬりの大糸を手の織機に

本日も朝早とくに起ひおと伏し御み山の宿を
即ちさすゆめよりおひでとひかえ其の数年昔ひ
萬葉集あるを今後内をも承認五る點と開設し
貢品とさうして書画の内東茶柳庵临亨の一
幅を送り、元々後成院退の間を探しの奉りし
所を又は临じてその也格のものとおもふとされ
柳庵もともと國お経味を圖ふする全くえり其
の临摹すありの興味無きとあつて消えうるの
代する本物も御み山の宿を終る事午後
をあらわす

○十一月十日 雨故大嘗祭有り(大嘗祭)京都
まで高田又おとすあま御市にて書画を詣だる

そのうち其の不角名ニ三と見る、尚飛羽扇向形もす
美文書、应和群書の風氣をあわしうくえ、
又雨の主ひ人高と流石に氣を拔のむと見る
紫の絵板、山あと描き幅の能く春色を
高くとめ取めてよし解うる、應和の後と
至し書のものありとあくとその筆の良きと
隠跡をうへて河原松陰色なる一場氣、
かきうる如れ、飛山の方にえりたはれ、又おもて
てあくと自やうと想の殿と拂うどる其能のい
ゆるゆてと深く紙本にてと御せらるる

景と興す

○あら東坂の町を往来し、角の大典、日本市街
の装飾、一应え終る。上方助助とおひがち
特徴すして車あわせと異なり、殊にその大典
より上方式の技術より、神和式よりも上り
但し紫錦と市の官着用と而てあると、
御子し京都を大切する所不思議とも大坂
以降は下の極み成る。うちより御子し大坂
の心あ焉として用ひてあるああまの、あと
さき各店舗の装飾とえども、やうやううう
く堅卓とあし車両あらへ方へと改め
るものやう見えきりと、例へば家並み、萬

歳を全字に牛子錦旗を掲げてくるを
とろほこ松の木元の壯元錦と大抵豪華
のれ元のあれ前と萬歳旗がとつて、あ側に
御つると例えたり、裏番のことをすばほ方の素
直大波の方わすく、何ん地不似えもとと
是えの力さん、清美榜のあ側の桜干
と大波角のうなぎと正月も車あわせと、
提灯こでんを祭るといふよ車あわせと、慶祝
さすあ年と賀の全國で大波、雪能登北の
見の刻耶、各戸に配電して默然とござるよ
き年々

○この東京の新橋と御茶ノ水の参列家の
有様を掲げ、即ち前回の金の河の書大丸に
言及したる如きの如きに於て御茶ノ水の新
橋もまた掲げり体やうの如り施設の木列屋
の併を宣す

即位大典あり心

その半も所詮



□大禮參列姿の大隈首相夫妻



時 日 月 四 十 二 年 四 月 四 日

○京都帝西大典に於て大典を祝陳列を行ひ
十二十三日には、公衆の閱賀と許し、
余の京都に入り、此を十四日よりは終し、終
了を生けり後、是も十日、物お開
設を行ひ、小内閣をさせ、列御さん、内閣
相前よりあゆみ、而後至並に詣にあり、
あるとんなり、列名を約し、利店を一々組
する能く、あつきもあり、領布を得る
印刷用紙を譲り、ねむーろくやめり、あ
るくとも、仕事の次第もさうむきあ
の二三をあきらけおく

耶穂会年報もあ

大正元年

本邦駕剎要玉に復アーチスト、サトウ氏
の舊文稿、併す全印の二十二冊、西暦
一九一七年のうち御歿辭會の宣教
師、久澤洋に於ける布政の執説と本
聞の報え、是年報の大部局と本
占め改め請回書を以て記します
か冊子です

在京帝西大典より是と同様のものや半
冊とあつて、あふに比較する
在京大統本とその附年代表一九七四
(天正二年)より一六三〇年(二十九年)と
お京大統本と折合一五七二年(天文

二十一年十一月八日（亨和五年）ニ亘る
日本耶蘇敎布政使之役料と云ふ
トヨタア土松山以代圓更而上大
切の事判也

一米圓ノ役メウンセント、ハリス書東

キモト大輔

本日のため止く。自古そのも間

一終メロンドン時移（昭和元年六月）至
北の地アモヤマモトモハシテシ

其二ニミモ石ニ留メ

ち島至福寺米圓ノ役賀付入の事

靴の穿きぬ。吉備門の対面の船の
逃走の西面御ゆきかく用ひ。廿年十月
を守の英人ヒル東一郎左衛門（モハラシ）
旋の三月。また三月四月
御真影を手の用ひ。十二月
日英兵の清野。慶和三年十一月

北朝主

平定記録本の内

兵記一九日。車記本。本故十冊
と出でる

えど平定記のりに。二十四本

ハ常圓寺の御本堂、もともさへ也衛家より
一より總川中世ニ二十四隻すね子
舟をも船で運ニ東京大に廻し子
「 」 皆々をもておきゆる也

高柳院の記述也

一連内記

二七

京 帝大寺

高柳院の後院の御本堂なり也

一湯湯准院記

三十六冊

醍醐寺藏

醍醐三寶院門跡湯湯准院記也
湯湯准院利義滿の様子とて又艶
義ね、義あこすをも見えありよ核也

「 千興一ノミミテアマ判トキモヘキシテ
北葉山名の記述（セハ）初のレテモト一見す
ルヒムシ

他ニタクのスホヒ山海山の和洋の字元
日本印、もの伊保サウのゆくおもろヒ成テテ
もの、うきよ一が十代、余のたる日暮
とくとく全為正、為山海の郭にれ
モリ、北都御本堂の御本堂の御本堂の
カタノ某の名を以て山海であるものも定
と雇用の名を賄ひ、高田お色化りとま
（）まく、東北夷

全為の御本堂の御本堂の御本堂の御本堂

の秦漢方のが畢竟衛君とす。而も無此時とす。ま
さうより二三五事又秦代の馬守の之を羅氏たる
所轉りより多くし今人うか言ふと仲良き事也
と云ふ元代總督の相助士功もまた是
又如、林希元は其の子の林大有も
其の子の林衡も又其の孫の林公
全掌もとつて之を勅仰せむ。其の子の林衡
の別れの林衡もとつて之を勅仰せむ。是
死罪を犯すも教化もとくらうと多く直行正義
の事である

古事記は既代とも消えても久行の二
十日以上も内に現一の手筋と云ふ

殷墟出土品

今七十数年前支那彰德府附近に於て殷代王都の墟址と云ふ地に龜甲獸骨のト文板瓦片を出土する事あつたる上記の大骨盤が即ち所謂殷墟と號す。其の歴史は古く元祖之頃殷の國號を有す。殷の國號は其の國の字法に成ることを示す。其の國號は又所謂殷民のことを骨董五六十枚也。

碑之部

漢もと六朝にあらず碑十枚ねの内殷民のもの西行北行の不花名碑と曰ひ及多し大西不花名碑と題の碑を尤も劣る。尺二寸方程。又字を少く鮮明である。丁口品目。此石碑

漢竟寧元年碑

一枚

漢充寂碑

一枚

漢郎魚碑

一枚

漢大文碑

一枚

漢永嘉元年碑

一枚

漢永嘉元年碑

一枚

卷之三

地節おやじ庵氏所も第可也
日をあつたるより三代功業
やう跡徳行の如年
御事のひく歎疚かること列名に據
之を後れの門人
津久井元和が著て時ある傳
又和と號すものなり而
一
ノ

中華書局影印

一月十九日
北山の宿
北山に打ちあわせ
おみやげ
し物せぢ
ひ

の五人合打一局ももとより伴せ方所を向の幅と
野球の用具の多くも高値で取引る事多きと
仰仰と仰ては男の子の江戸へ出でりよめ也
おまよせか近頃おもて素し故殊の如きの
事に之と並んで誰も見る所無く之へ詠の
歌を亂れたり上手に詠うる事ありや當ての事
而今其家では五人の娘が女中と號す

○十一月十七日 仰の旅館にて候
仰の前段大吉祭に附せし事
あつてはも思はず まことに
乙あとまの股に折衝毛生毛
疋んでは、

○さる京和歌をかき入るて、此の種の御宿と
えり内一點奉る事ありと以て、所列と思
ひ難く内にいそむぢうし。細田体の背筋と掛
の筋と、二つとも物と見えますと得
大寺所奉神復事室年中りや納主正士在下威
那の大村仰の骨董と其の体制其の刻字
真に稀世の珍重しゆの多くを賣と見えども
又ねど有。此器と衣服と、又年、又刻字
をと後又そよいとおもひて、此地の某工房
で考へ。以後、用ひゆる所は、此工房也
然大村家に取次ぎる木崎ぬる江口、河口姓
と考へ出る事多矣。此の技术本を存せよ其

アーニはひだりを二枚あんがま一枚刻字をし
れども（此の事すあり泥の内体内を四十筋
行の刻字と一筋行一枚づく柱も一筋に引
つけてのまし板もまたよび板も出来てある
車えづま車あら車麻のものと手とんびとを
やうあ刻字と詮みを行ふべしと紙縫い
まくはるを御後御司し仕じ役て紙縫い取
めへるにとどめられりと紙縫い余る年
より北極毛の角からぬる清毛（銀圓）をありと
おとせうせ人を五人内に心産（下向）せざる事
ミヤ六歳の岩をさし早世してとぞ、死ぬ事もす
ま

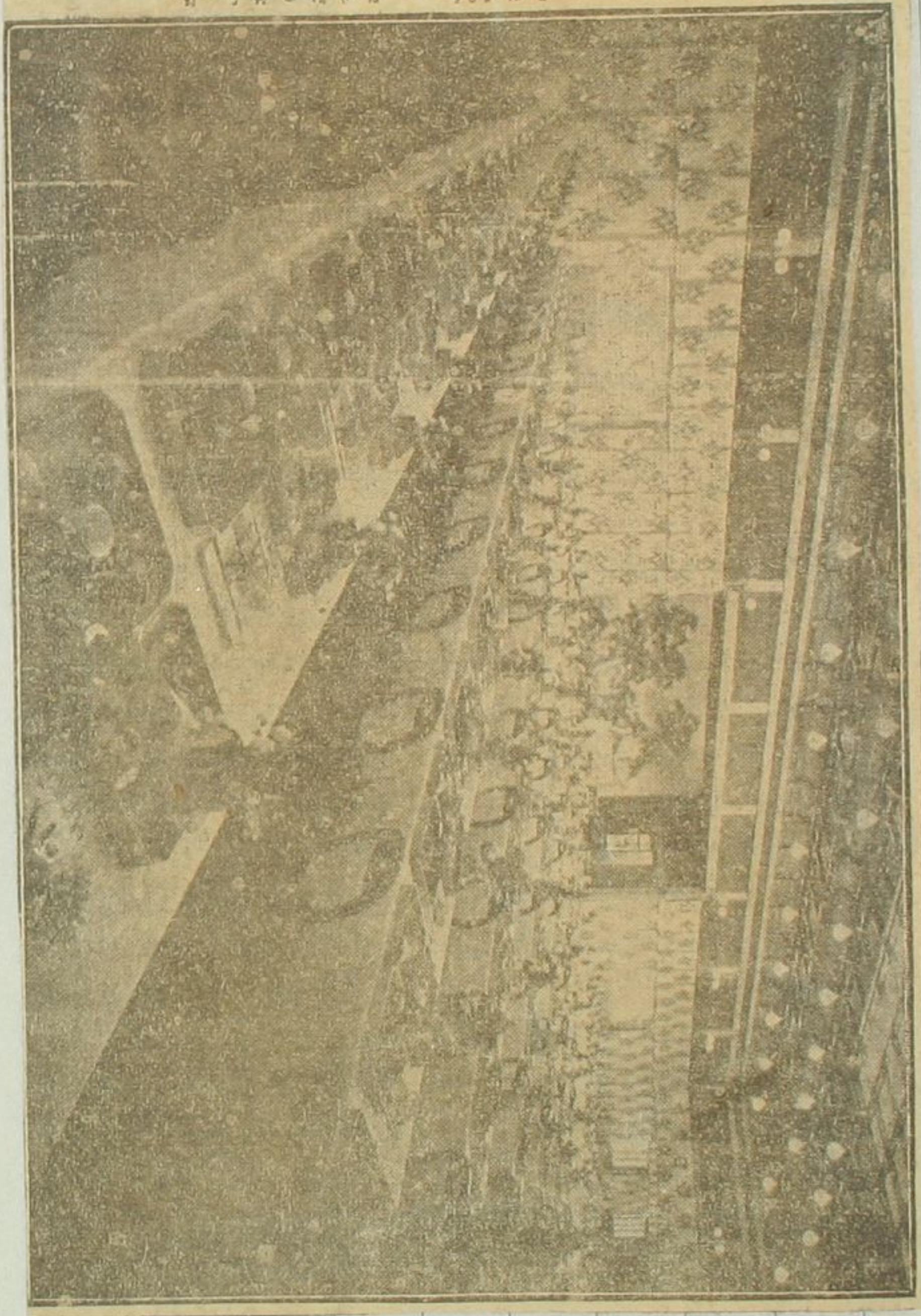
主ととも其家より名づけられ鏡公の才三子
也とす。其骨氣り体裁りぬくも主流うむち又
もれんり出立し、わざわざ御殿内に致し爲大
倭四萬木下郡山五里猪井山山堂に葬るとあ
リ、誠ニ殊べべき墓塔也。大正四年十一月
十八日大坂家中一誠す。

刻字四十箇行之清々益々肉全にあり身に比す
れ、益の方大きくて後つしまを刻する元令の
筋にさうす板七重丸文中右に優秀ありて謂
ふを得へし終盤に至りし今も御殿に存する
と況む、鎧の糸の多くそぞりて保ひんすむと
跡をよし北至アリシキ年も古くも存する

おもてり主在家のゆきよしより也
家主の事も多々ても早大の間事假のを、
ゆくはよしんもせんもせんもゆ
えまひ後陽ノイシ家前ヒシ保夜也
これす

の太閤候あるのゆきよし家前半の階に上る大隈
首おの歩り匪印方につきか家前を泣き素一
先づ中央一トモ避けも側も上る（中央を
壁下の歩し給ふを）（中央を）先に歩
の口移一方に就くが家前を辭て宿子も
仰き立えと從えりと傳す

玉座近き大饗の宴場内部



+11

卷之三

て宮懸り條二十七日六十
たつは賜に相接首限大
膳御の饗大

御製

天皇陛下には御大禮に歸し畏くも御近詠あり三島侍講に内覽
仰付られたりと漏れ承はる謹誦し奉れば歎慮のほめ畏し
とも畏し

積水連天足大觀 衆川流注湧波瀾

由來治國在修德 德量祇應如海寬



大限内閣總理大臣

大饗食第一日の御献立

おほみあいだい
大饗餐第

一月の
か

の御献立

同上

青森南津輕郡藏館村
岡山縣赤柴郡可真村
武庫離宮御苑

要なる材料並に其產地は左の如し	献立	主要材料	产地
一 蒜 沖縄 一 蒜 姬 鮎 紅鮓 千島	醤 滅 一 蒜 姬 鮎 紅鮓 千島	醤 滅 一 蒜 姬 鮎 紅鮓 千島	醤 滅 一 蒜 姬 鮎 紅鮓 千島
一 烹 包肥育牝鷄 牛飼肉	牛飼肉	牛飼肉	牛飼肉
一 烹 熟 冷	花菜	洋菜	長野
一 杯 柑 漬 酒 (ポンカン)	牛織	肥育牝鷄	宮城縣
一 杯 柑 漬 酒 (ポンカン)	菜内豆菌	醤	信州
一 杯 柑 漬 酒 (ポンカン)	千葉	同	宿御苑
一 杯 柑 漬 酒 (ポンカン)	近江八幡		沼谷

アラツクハンアルグ	山形縣東置 鴨半屋代村
同シヤスラ一	同前
酒類	
一塞爾利酒	アモンチヤード
一白葡萄酒	シヤートイケム
一赤葡萄酒	シヤートマルゴー
一同	クローウジヨー
一三報酒	ポムリー
麵炮營排及燒酒數品	エアルノ一
一珈琲	同シヤンバニニユ
林業試驗場恒春支場	臺灣總督殖務局附屬

大富先一〇金傳大内有寺三千五百の安樂
此の其事等と申す事無く金を取れ
里余りも多きも多き大内有寺此を資
格有りたまはりひれ少額も設けねば

とあつて一寸多きわニ銀色の如くありて此
を以て大農兵主とすと南に也また移り居る
久又と名す 改朝の向こ向直破れゆくも亦
白雲也

人間事は甚だしく、身の生れ事で御ゆる
典うぢに無きことありまじく、えり
まく行ひて耶あはれり有り相あまう
ちあらむ、うきよとくにやうく、口の筋
あ、出てすこ細めあせり、口の筋
もくもくとすこ細り、ひきうち限ゆく大
典うぢにやれや一か近聞へ出そひに
とけんを以て日とえろくにゆくに往ひ

考ひよ難國をもうめぐり大典をえむかまく
りえりせとまよひこぬまよひ長くはる度
ニシテ先帝のめとを執事のゆきのちのを
降へう闇の難ひ大典の大主めと一もあくえ
き年華化の流れ漏飲と一もとすけと
まゆる多き御多きのとくに考めとも云ふ
ことか夢る段を氣づくも流々や又水も稀
支人のあらやう其間の事政界をめぐる
し教育一方に身と育てられても身体の若方
の上ものがくも漸く闇地と就えをもお
ね甚く列する自身とさつてすまめあつた
物をもうれど然くも大典と呼へ大臣と呼

式に列しそんへや儀ミ禮説の正體の服持む
るを禁廢稱上の人にぞみとぞも全く夢び
ゆく、自古うゐお變ねくとも常より貴人
閻と引きお角斗の技と急足(じゆそく)と
がくすえくの據のう事業計意のあり
身と起して資産を蓄す術(じゆつ)もあり
お柄(おじや)の基業を築きを既ニ二田えき
のつづけ河西の而と接(せつ)し今又三ひび
河西にまたり併(あわ)せ大典に慶(めぐら)す
又夢のうくせでぞと得ぬ
北川甚く、河西に正義のへりをもつてお
金を取(と)しめり必ず我のうちむかえ方を

揆抄一に人あり自らと見えりあしゆり
都ニ三りとせり也。自人とこども間でく
因し用うしニ處自ら佛より滅想
をえん難。況へや佛もまた人の想
觸ひんとみれ。況へや佛もまた人の想
族骨もとし。佛もと許されし也。此
の衝にゆる事多き。似たる言ふ事
枝々枝を四方面の衝にゆる。世人あら自ら
の評し得す所故也。然くそ僕の事柄を
妄てえ氣をあと思へば、こゝには
まづ助勢と見て。僕の主役の努力
をも無成の如くもじとせんとせす

の人。此の揆抄とあらとて何と仰ふ。物を考
さう
大正四年十一月廿六日後希吉お堅略記
子酒をうわらう。うれと身旅館に宿せ
あら久伸。ゆとゆもしらむと
节と走る



口琴曲

● 大饗第一日に奏さる 風俗歌

十六日大饗第一日に行はせらる、悠紀・主基地方風俗舞の際に奏せらる、
同風俗歌は左の如し

□ 悠紀地方風俗舞歌

△ 参音聲 年魚市渴

わたつみのかみもほぐらしあゆちがたちたのうらなみちよのこゑする

▲ 樂破聲 二村山

きみがよのよそほいこそみんこきはなるまつみたけこのふたむらのやま

▲ 楽急 五十見嶋

きみがよめぐみうれしくいらこしまあまのこらさへうたふこゑする

▲ 退出音聲 高師山

まつかぜのこゑいやたかきたかしやまわけてもけふはちよよばふらむ

▲ 樂破 秋原

おほきみのみよしろしめすこきつかせあづきしきにもふきわたらるむ

▲ 樂急 松山里

よろこびのくもこみわけりむらさきのいろににはへるあきのはぎはら

▲ 退出音聲 玉の浦

ふくがざもひだもならさぬおほみよにいやさかのらむまつやまのさ

▲ 退出音聲 玉の浦

ようづのびけるやかにもてるつきのかみをみがくたまのうらなみ

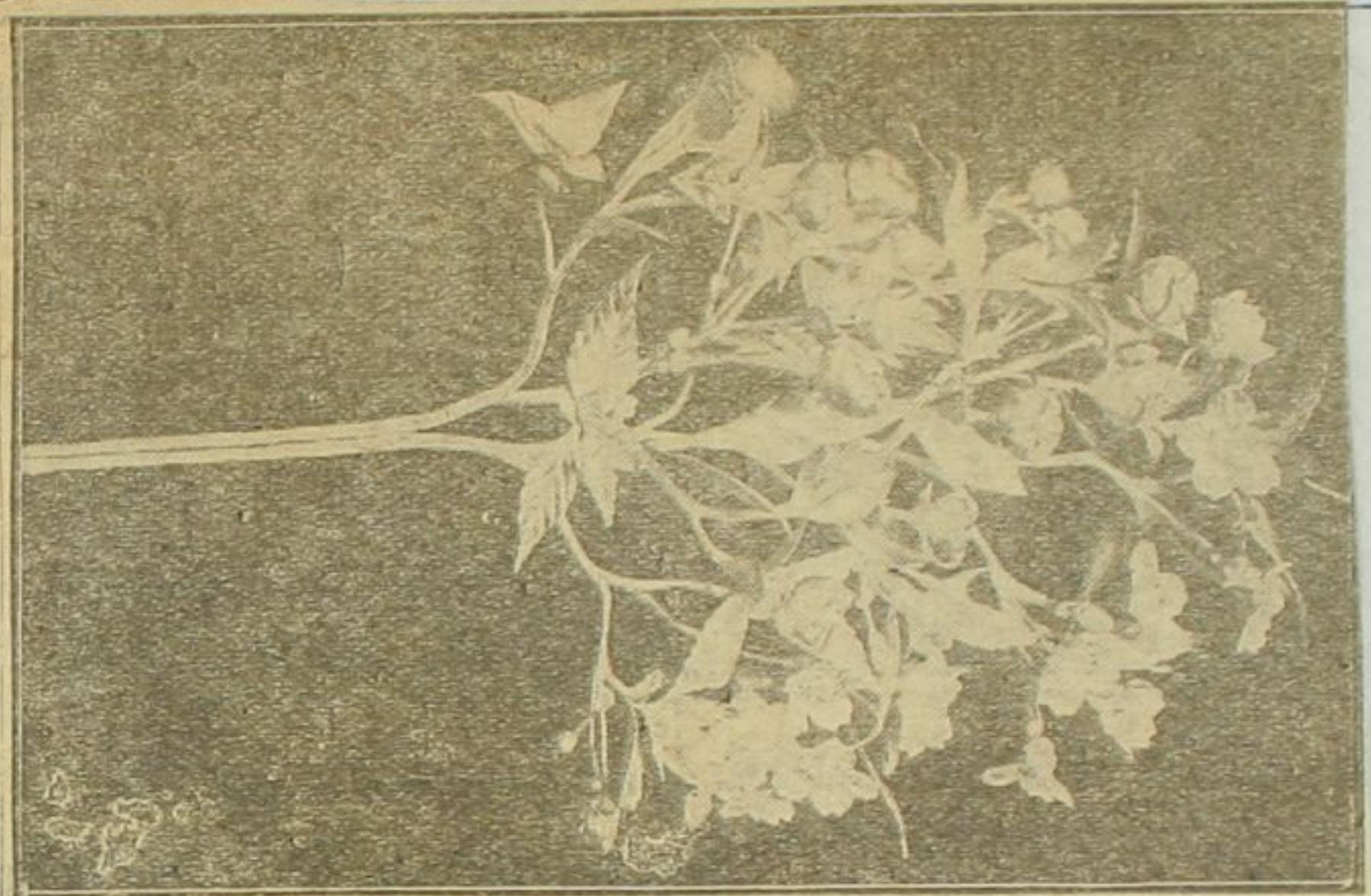
(京節十五日音譜)



大正紀念に改名とて産出しゆる、か代
向その包ねねうる丸代ふをゆうるの
児もとゆうる児も六余り流珠と解す
と似うる。



大正九年正月五日
向うの包ねあうて物語を仕りよ
見えどもおとするも六余り流味と解す
と似りやう。



挿畫

○大饗第一日に奏さる、風俗歌

十六日大饗第一日に行はせらる。悠紀、主基地方風俗舞の際に奏せらる。

同風俗歌は左の如し

□悠紀地方風俗舞歌

△參音聲 年魚市渴

わたつみのかみもほぐらしあのちがたちたのうらなみちよのこゑする

▲樂破聲 二村山

きみがよのよそほいこそみんこきはなるまつこにけこのふたむらのやま

▲樂急 五十兒嶋

わたつみがよのめぐみうれしくいらこしまあまのこらやへうたよこゑする

▲退出音聲 高師山

きみがよのめぐみうれしくいらこしまあまのこらやへうたよこゑする

▲樂急 小豆嶋

おほきみのみよしろしめすこきつかぜあづきしまにもふきわたるらむ

▲樂破 萩原

よるこひのくもこみにけりむらさきのいろにほへるあきのはきは。

▲樂急 松山里

ふらがざもにたもならさぬおほみよにいやさかのらむよつやまのわい

▲退出音聲 玉の浦

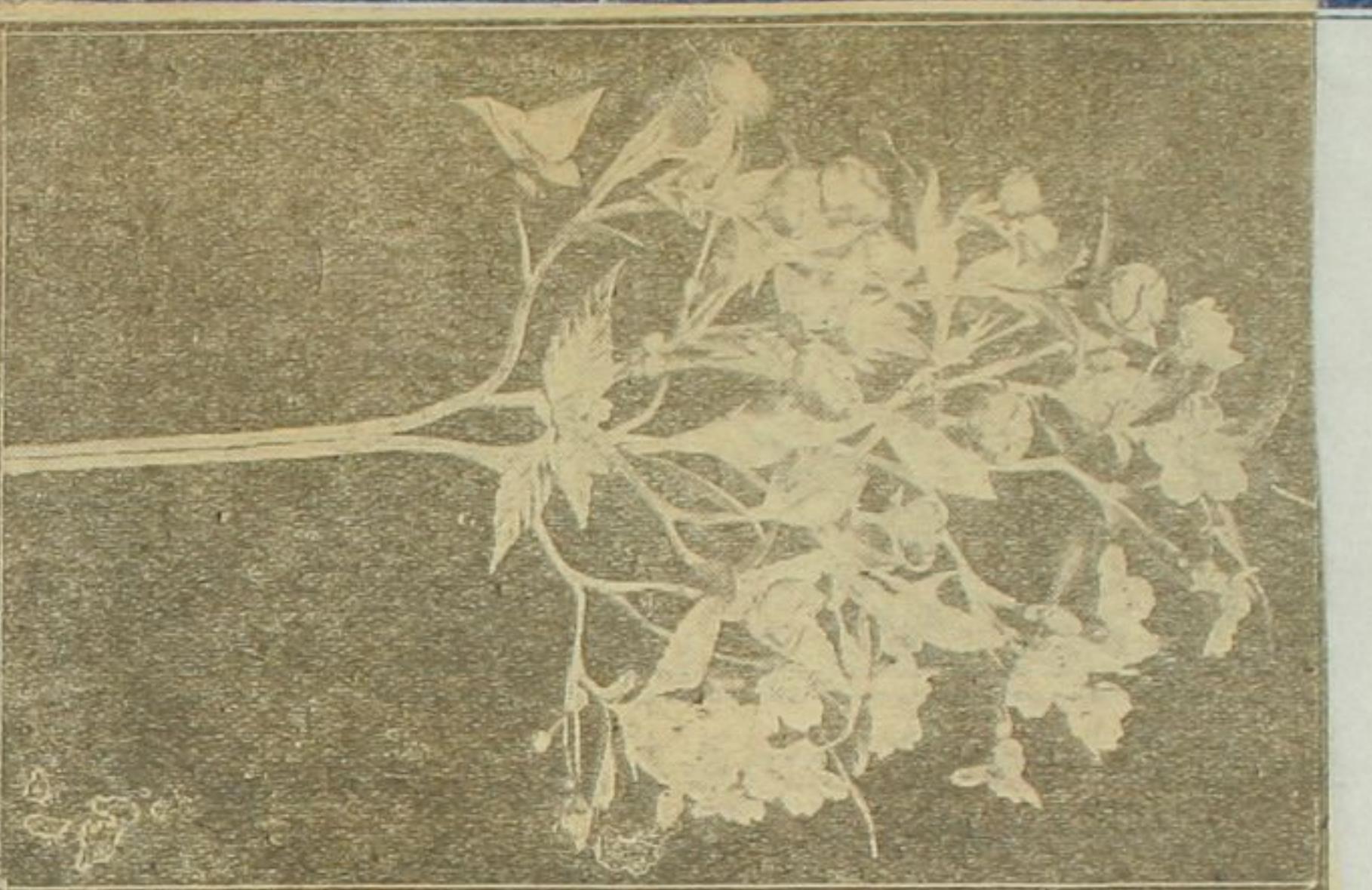
よくわづのなむるやかにもてるつきのかみをみがくたまのうらなみ

(京節十五回音譜)

十二



大典紅糸に改名して堂出しが、か代
向の色の包ねふうに丸化を仕りての
火もととす。元も六全の流味と解す
と似たり。



播州舞

□ 大饗當日群臣に賜はるし

● 大饗第一日に奏さる、風俗歌

十六日大饗第一日に行はせらるゝ悠紀、主基地方風俗舞の際に奏せらるゝ同風俗歌は左の如し

□ 悠紀地方風俗舞歌

△ 參音聲 年魚市渴

わたつみのかみもほぐらしあのちがたちたのうらなみちよのい感する

▲ 樂破聲 一村山

かみがよのよそほいこそみんこきはなるまつたけこのふたむらのやあ

▲ 樂急 五十兒嶋

かつかぜのこゑいやたかきたかしやまわけてもけふはちよよばらむ

▲ 退出音聲 高師山

おほきみのめぐみうれしくいらしまあまのじらかへうだふい感する

▲ 樂破 萩原

よひのひのくもこみにけりむらさきのいわににはへるあきのはあはら

▲ 樂急 松山里

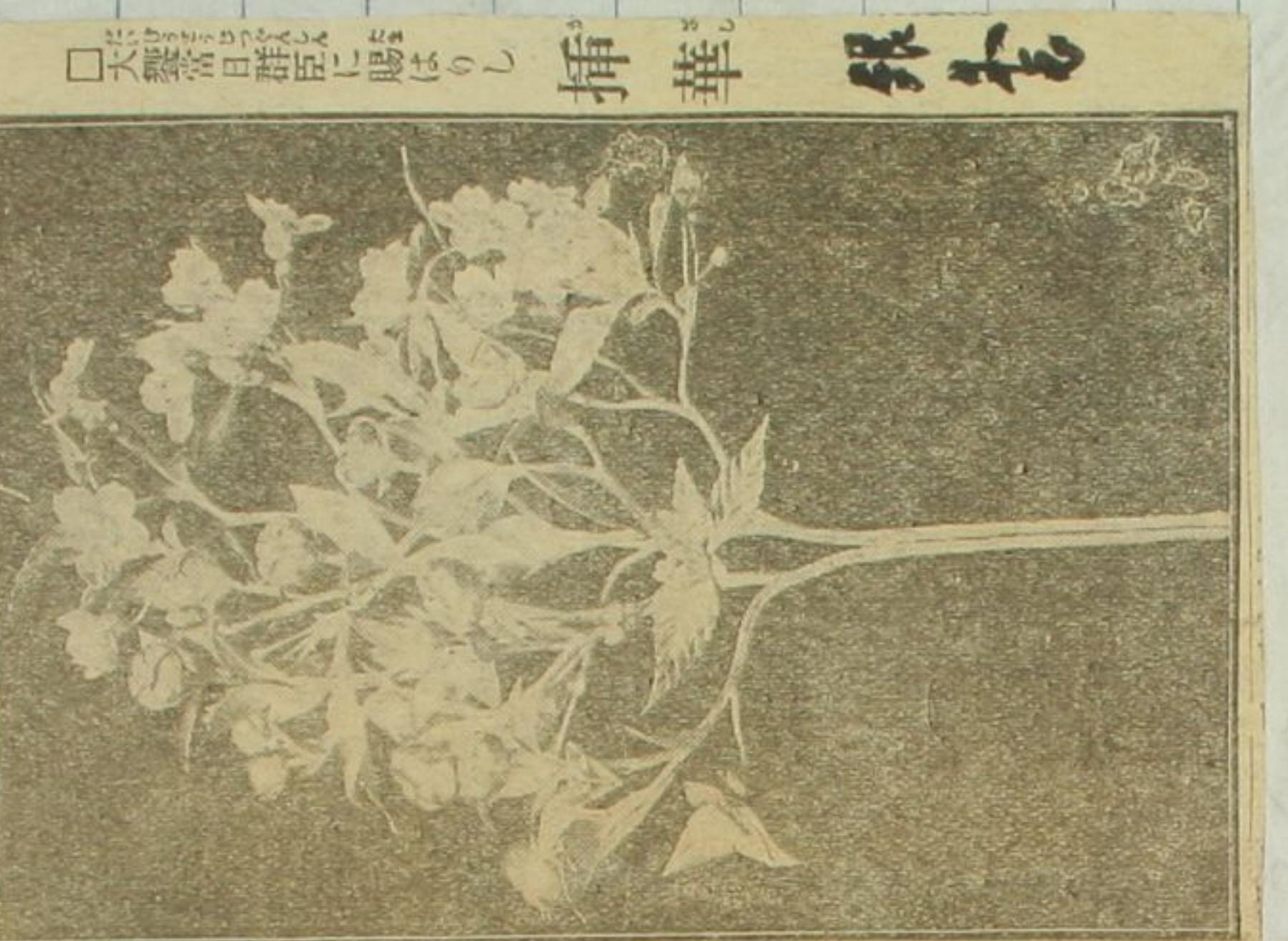
ふくがざもいたもならさんおほみよにいやさかのらむまつやまのせり

▲ 退出音聲 玉の浦

（京師十五日音聲）

十一

口大舞當日群臣に賜はりし
挿華銀本



○土月十九日又奉行當行也。直行の忠勇
殿御令歸さんとおちゆの事多金を助ひ、北
に再不浪舟船賃二千石也。陸路も直行の事
か御多般の内定に就くば、馬防法事之支
那に附し砍除とまわり、其表とて、氣にこと
と多効延効との言す。もとより是れに文書
あしとて一印を記し是を以端ノもと輪じれ
て、あしはの御内も縫の方に加の事と考究を
うと取ふ。ひとえに御縫すうじと云ふ
馬防も背縫ううじと、漏えいをとぞくら
わねくも通巻に行きキ。船とせうへ行く事

久おほくせぢりと内渾身所候也。馬を以てのめ
さむるをとる事と御内の仰れと早く罷め
とまの内実もと御方の仰れとまのものとす
意比羅のうじと後壁をあらそつて囲りあは
ぬ外部ひづくら駆きまゐる内部ひづくら
の所しきと内のがまに一改しておまえ大人
の耳無きども内閣を守り一く保りて
と終る

本の外帶あるの唐もんをうきひづくり
國もと源り一もと素のうちもと使ふよ
中原本三筋をぬこ連脚とある。アリ
とうとうちの在たの

承常詩錄 一卷 四季本合卷二冊

後柳邊編

聖翁歌集 一卷 三冊

冬冉風搖歌と異ります樂のありを
モ利(り)きより聖翁の名故也

清夜集 和文 錄音量聲之行者

法苑真芳 日本舊刻本

北内祖余抄は樂翁の集清風今も猶も所
の如き嗟乎うへん得難きを施中身を御のあ
扬拂(ひらひ)き也

つ威那大村墓誌銘、つきつてむかの信丹羽

伯弘をうち作る所の跋又あつて西山鷗社高ち
其嘗(とき)とえりとづき方々收めまく

右唐奈公墓誌銘明和年間大和國葛下郡穴蟲山崩出焉云已丑歲予友佐藤叔茂從我明復先生隨太田公鎮浪華城公與先生固好事者於是先生告公搜索浪華所藏古今石遺文獲諸天王寺中而拓之數本叔茂亦請先生手拓二三本予得此本於叔茂叔茂曰誌銅質塗金以黃金形圓而扁上狹下廣中空可盛物口徑八寸深七寸七分腹圍二尺五寸五釐底二寸四分五釐半始覽之文字鮮明無一點畫可疑及至拓之拓本反有模糊不可辨者焉蓋表金不蝕而裏銅蝕故也或曰此火化盛骨器未詳也平按大日本史不載公傳然以誌中所稱考之公之業德望昭然可仰也誌文用偶儂體粗似六朝唐初人所作且銘中位由道進榮以禮隨二語足以想像公之所以為公者矣而書亦有晉人之遺韻惜乎集名迹不可得而識也夫據誌公嘗除越後城司以御蝦夷之衝則公嘗有功德於我州民矣為我州民者雖感公恩德建祠祭祀

可矣豈惟仰公之才德而已乎而所謂越城者其所在今不可考也予將行問博古君子而謀之也

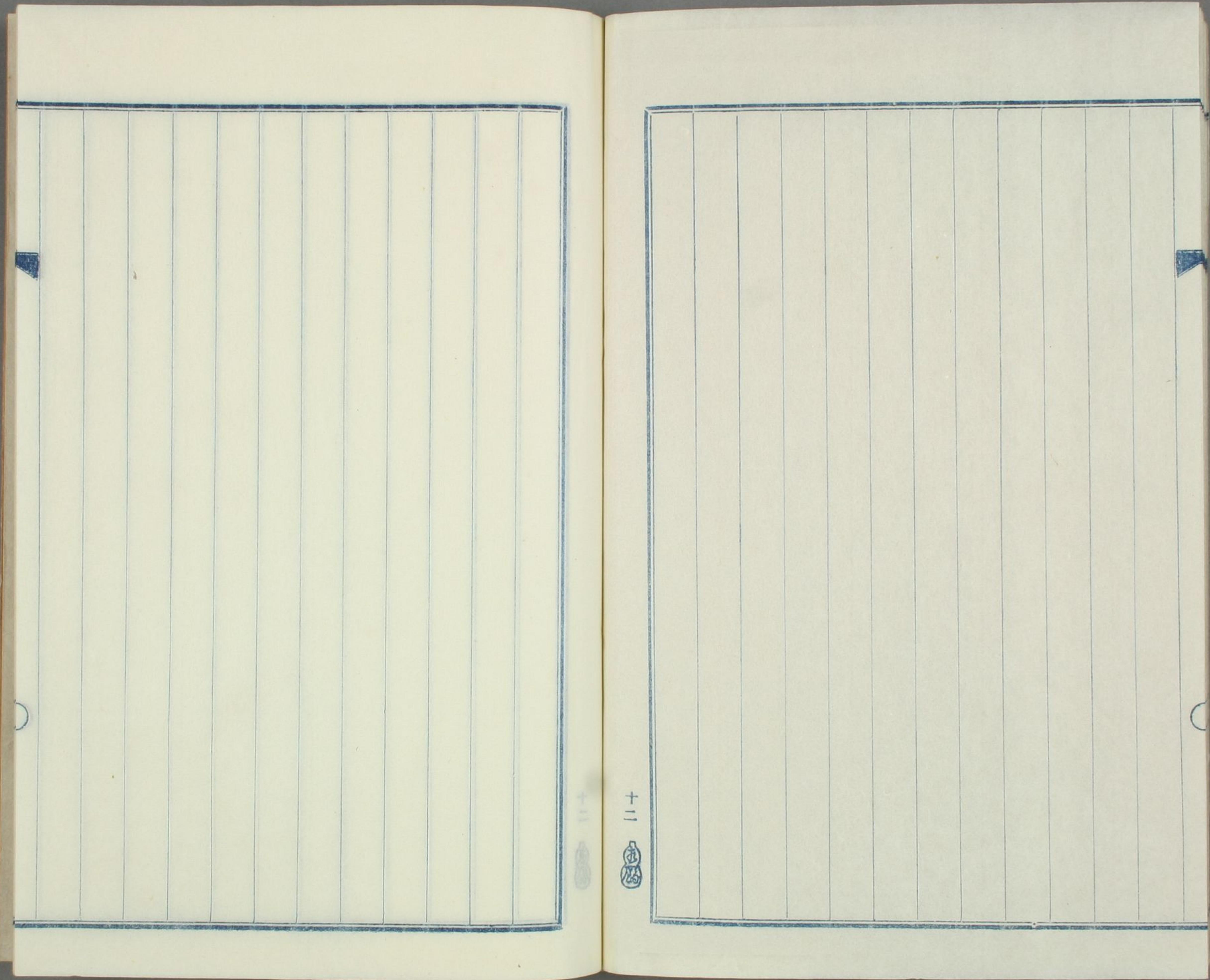
天保三年八月十九日丹羽惠敬跋

惠按源能登守順倭名類聚鈔曰越後國府在頸城郡或曰今頸城郡高田城西北一里二十町許有國分寺村古國府也蓋今府國讀同是疑此墓誌所謂越城或曰頸城郡春日山下有稱中屋敷者上松氏之治所而當時亦稱府中見道興准后國雜誌狀據今高田等地方口碑古國府在高田之東今不可考而寃治三年國圖載中城者某或此耶未詳孰是姑並書以待後考七年六月廿八日惠又跋

慶雲四年公薨至今年千百三十八年矣

桑名君曾刻諸集古十種中雖精則精工矣比之拓本殆不可同日而語也

十五年甲辰十月十四日書



以下全て
白紙

